

第一部 講演 1

小児の冷えに桂枝加苓朮附湯

紀 優子 先生

きの小児科医院

2000年 群馬大学 医学部 卒業
同 年 東京女子医科大学 東医療センター 小児科
2002年 千葉市立海浜病院 新生児科
2003年 京都第一赤十字病院 小児科 NICU(新生児科)
2007年 洛和会音羽病院 小児科
2014年 きの小児科医院 開業

はじめに

しもやけ(凍瘡)や感染症後の冷えなど、小児科領域でも冷え症をよく経験する。漢方エキス製剤(粉薬)は内服が困難なことが多く、また桂枝湯ベースの処方では、温めが不十分なことが多い。桂枝加苓朮附湯は附子を含む数少ない漢方エキス錠である。

症例 1 しもやけ

症 例：10歳 女児

主 訴：手のしもやけ(両側第3指から第5指)、足のしもやけ(両側第1足趾から第2足趾)。発赤、腫脹、疼痛を自覚した。

現病歴・所見：図1に示す。

経 過：ビタミンE錠50mg 4錠/日(分2)・クラシエ桂枝加苓朮附湯(EKT-18)12錠/日(分2)を処方したところ、徐々に指の発赤・腫脹・疼痛が消失した。温くなる3月まで内服し廃薬とした。

考察(処方の利点)：凍瘡の標準処方である当帰四逆加呉茱萸生姜湯は、小児にはとても飲みにくく、実際に「苦くて飲めなかった」という声もよく聞く。一方で桂枝加苓朮附湯は、錠剤であるため小児にも飲みやすく、漢方エキス製剤(粉薬)が苦手な小児にでも服用可能である。

軽症の小児例においては、活血薬をあえて用いなくても、桂皮・附子の温陽通脈作用と白朮・茯苓の利水作用に

よって停滞した血や水のうっ滞を取り除くことで局所の循環と腫れを改善し、治療に導くことができる。

症例 2 感染症後の冷え

症 例：6歳 女児

主 訴：35度台の低体温

現病歴：X年1月13日に38.1度の発熱があり、1月14日に他院でインフルエンザA陽性にてオセルタミビルリン酸塩ドライシロップとアセトアミノフェンが処方された。同日の夜間に40度となり、1月15日も発熱が持続するため当院を受診した。血液検査所見からインフルエンザに細菌性肺炎を合併していると考え、CTRXを静注した。一旦改善

図1 症例 1 しもやけ

症 例

10歳 女児

主 訴

手のしもやけ(両側第3指から第5指)、足のしもやけ(両側第1足趾から第2足趾)。発赤、腫脹、疼痛あり。

現病歴

X年12月ごろから上記の訴えがあり、ひどくなってきたため、2月X日に当院外来を受診した。

所 見

両側第3指から第5指まで発赤、腫脹、疼痛あり。
舌：淡紅、薄白苔、舌下静脈怒張なし
脈：沈
腹部：平坦・軟

するも再び発熱し、炎症反応の悪化をきたしたため1月17日に入院加療となり、細菌性肺炎・インフルエンザ感染症の診断にてペラミビル水和物・ABPC静注にて加療、1月20日に退院した。

経過：退院後の再診時、いつもは平熱が36度台後半のところ「35度台前半までしか上がらない」と母親からの訴えがあったため、クラシエ桂枝加苓朮附湯(EKT-18) 12錠/日(分2)を7日分処方したところ、1月26日には36度台となった(図2)。

考察：インフルエンザと細菌性肺炎の治療により、通常の感冒に比べて体力の消耗が激しく、ひどいときは強い倦怠感残り、手足は冷え、活動性は低下する。さらに、抗生物質や抗ウイルス薬は、東洋医学的には清熱解毒薬に属し身体を冷やす側面がある。このような場合、冷えは表だけでなく裏にもまわるため、営衛調和の桂枝湯に補脾の白朮・茯苓、温陽の附子を加えることで臓腑と末梢の循環を改善する効果がある(図3)。

図2 症例2 感染症後の冷え

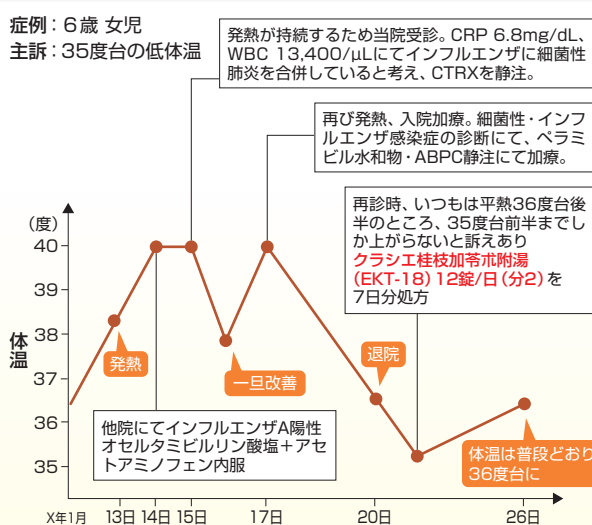
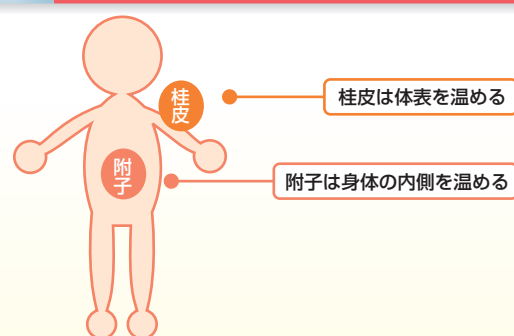


図3 インフルエンザ・細菌性肺炎の治療によりおきること

- 通常の感冒に比べて体力の消耗が激しく、ひどいときは、強い倦怠感残り、手足は冷え、活動性が低下する。
- また抗生物質や抗ウイルス薬は、東洋医学的には清熱解毒薬に属し、身体を冷やしてしまう側面がある。
- このような場合、表だけでなく、裏にも冷えがまわり、営衛調和の桂枝湯に補脾の白朮・茯苓、温陽の附子を加えることで臓腑と末梢の循環を改善する。

図4 附子は身体の内側から温め、桂皮の温陽通脈の作用を助ける



附子は身体の内側から温め、桂皮の温陽通脈の作用を助けることから、非常に温める力の強い、使いやすい生薬である(図4)。

まとめ

小児は純陽の体質といわれるが、疾病の経過中に容易に冷えることがあることから、冷えの改善は小児科領域においても大切な視点である。

桂枝湯の営衛調和をベースに散寒除湿の生薬を加えた桂枝加苓朮附湯は、附子の分量も少ないため適応が広く、服用しやすく、小児の一時的な寒証に対して有用な処方と考える。

Discussion

木村：今回は錠剤を使用されていますが、小児科における漢方薬の服薬コンプライアンスの観点から、錠剤にどのような印象をお持ちですか。

紀：粉薬の服用を嫌がるお子さんでも、錠剤なら「いいよ、飲んであげる」と積極的に服用されることも多くあります。漢方エキス剤に錠剤の選択肢があることは大切なことだと思います。

木村：漢方エキス製剤には桂枝加朮附湯もありますが、今回は桂枝加苓朮附湯を選択されました。「茯苓」が加わるメリットをどのようにお考えですか。

紀：しもやけについては、浮腫を改善する効果として利尿作用を有する茯苓が入ることは大切です。また、インフルエンザ後には脾の機能が低下するため、健脾としての茯苓という位置付けが重要だと考えています。